

2025 年度

北嶺中学校入学試験問題

国語

(注意)

- 1 問題が配られても、「はじめ」の合図があるまで、中を開かないで下さい。
- 2 問題は全部で **14 ページ**、解答用紙は 1 枚です。「はじめ」の合図があったら、まず、ページ数を確認してからはじめて下さい。もし、ページがぬけていたり、印刷されていなかったりする場合は、静かに手をあげて先生に伝えて下さい。
- 3 答えはすべて、解答用紙の指定された位置に書いて下さい。
- 4 字数が指定されている場合は、句読点や記号も 1 字として数えて下さい。
- 5 質問や用事がある場合は、静かに手をあげて先生に伝えて下さい。ただし、問題の考え方や、言葉の意味、漢字の読み方などについての質問には答えません。
- 6 「おわり」の合図で鉛筆をおき、先生が解答用紙を集めおわるまで、静かに待っていて下さい。

一

次の文章は、小学五年生の男の子が、かつて軍医長であった祖父から聞いた話です。読んで、あとの問いに答えなさい。

おじいちゃんに乗っていたのは長さが百メートル以上もある大きな潜水艦^{せんすいかん}だった。乗組員は百人以上いて、潜水艦の中には小さな神社まであった。色んな役割の人が乗っていた。潜水艦を操縦する人や魚雷を撃つ人もいれば、コックさんもいたし新聞を作っている人もいた。百人も乗っていると病気になる人も出てくる。人間の身体は陸で^Aくらすようにできているから、いつまでも海の底にいと変になってしまうんだ。

潜水艦も人間と一緒に。時々、休ませないということを聞かなくなる。浮上充電といって、真夜中に浮かび上がって充電するんだよ。その時、空気の入替えもする。新鮮な空気が入ってくると中にいる人たちは見違えるように「1」なる。新鮮な空気は甘い、といった人がいたが、あれは本当だ。努力せずに吸い込める空気はとても美味しいんだ。

我われが乗った潜水艦が出撃したのは昭和十九年十月のことだ。その頃には日本はもう負けそうになっていた。敵の戦闘機^{せんとうき}が沖縄の航空基地を何度も襲撃していた。沖縄が敵の手に落ちたら、今度はそこを拠点に本土が空襲される。そうになったらもう勝ち目はなから、日本も応戦してものすごい空中戦をしていた。第六艦隊所属の潜水艦も次々に出撃していった。おじいちゃんが乗っていた潜水艦もその中の一艦だった。

広島県の軍港を出た潜水艦は、瀬戸内海を抜けて豊後水道^{ぶんご}を南下した。その頃の潜水艦は水の上を走る時はディーゼルエンジンで、水中では二次電池で動いていた。いまの潜水艦とは比べ物にもならない。それでも、最初のうちは案外スピードが出るものだった。水の上だと一時間に三十キロくらい進むんだよ。ところが、いったん海に潜ると三ノツトの速度で進むのがやっとだった。時速にすると、たったの五・五キロだ。敵の戦艦に囲まれたら、とても逃げ切れないだろうと思った。「2」なって、出撃して間もない頃、航海長に色々とたずねてみた。この人はおじいちゃんの中学校の先輩で、知っていることなら何でも教えてくれた。

「十二時間休みなしで潜航しても、三十分で敵に追いつかれる」と航海長はいった。

「それでは、深いところで待機していた方がいいかもしれませんね」

「その通り。状況を見極めることが重要になる」

状況を見極めるといっても、潜水艦には敵の攻撃を防ぐようなものは何もない。見つかったら海の底にじっとして、あとは運を天に任せるしかない、そういうことだった。

航海長は他にも色んな話を聞かせてくれた。いまでも憶えているのは、①インドシナ海の沖合で敵の船に出くわした時の話だ。最初のうちは手柄話かと思って聞いていたが、そうではなかった。その時、航海長たちが見つけたのはアメリカの輸送船だった。相手

は一隻だけで、近くに潜水艦がいることに気づいていなかった。魚雷で海の底に沈めるのは簡単だったのに、輸送船を攻撃するかどうか、みんなで「キョウギしたというんだよ」。

それを聞いて「3」思った。「会敵絶対攻撃」ということがいわれていて、敵を見つけたら攻撃するのが当たり前だと思っていたからね。ところが、そう単純な話じゃなかった。潜水艦の狙いは航空母艦か、戦艦だ。敵の空母を沈められれば最高だ。駆逐艦に反撃されて死ぬことになっても、それなら諦めもつく。でも、輸送船を沈めても大して自慢にならない。それに、攻撃することによって自分たちの居場所を敵に知らせることになる。難しいところなんだ。

「結局、艦長の判断で攻撃は中止された。艦長の判断は正しかった。輸送船を見送って一時間くらいたった頃、敵の戦艦隊が近づいてきていることが分かった。しかも、全部で十一隻だ。あの時、輸送船を攻撃していたら、いまこうしてはいられなかっただろう」

航海長の話は、潜水艦という兵器の特質を言い表していた。見つかりさえしなければ、潜水艦はかなり「4」敵を攻撃することが出来る。見つかつてしまったら、あとは海の底でじっとしているしかない。

その頃にはもう、高性能の水中探知機や爆雷が開発されていて、潜水艦は非力な兵器になっていた。だから、海軍の偉い人たちからも、戦力としてはさほど期待されていなかった。海軍の主力は戦艦だった。『大和』のことはお前も聞いたことがあるだろう。とても大きな戦艦で、乗組員が三千人もいた。海軍の自慢はあいう見栄えのする戦艦で、潜水艦はいつも軍港の端っこの目立たないところにいた。番号がつけられているだけで、名前さえなかった。じゃあ、潜水艦乗りはやる気をなくしていたのかというと、そんなことはない。だからこそ、逆に強い敵を倒そうとみんな必死になっていた。その強い敵が現れたのが十月二十五日の夜だったんだ。

おじいちゃんたちが乗っていた潜水艦は、その日、フィリピン東方沖の水深四十五メートルのところにいた。とても危険なところだった。ガダルカナル、ニューギニア、サイパン、ペリリュー……アメリカ軍は日本の占領地を島伝いに一つひとつ攻略し、五日前にフィリピンのレイテ島に上陸していた。レイテ島のリモン峠の戦いは、あの戦争の伝説の一つになっている。海の上でもものすごい戦いをしていくらしく、「敵空母を撃沈せり」とか、「『武蔵』は魚雷攻撃を受けたるも航行にシショウなし」といった電文が次々に入ってきた。電信兵は汗だくになりながら電文を解読していたけれど、一体どちらが優勢なのか誰にも分からないほどだった。フィリピンの海はとても暑かった。潜水艦の中は湿度が八〇パーセントもあって、みんな汗をだらだらと流していた。夜になってほとんど温度が下がらない。それなのに艦内の冷房装置が切られ、扇風機も停めろという指令が下った。それが夜の八時頃だ。

司令室では、暗号長が汗だくになって敵艦の針路を説明していた。この時、初めて夜光虫の話聞いた。いや、耳にしたことくらいはあったが、実際に③そんなことがあるのだと初めて知った。

夜光虫というのは、いってみれば海の蛍だ。一ミリにも満たない微生物だけど、夜になると集団で青白い光を出す。船は白い泡の線を曳いて走るだろう？ 夜光虫はあの泡に群がってくる。泡が消えても青白い光はなかなか消えない。低空で④哨戒していた海

軍の搜索機が、その光に気づいて我われに知らせてきたというわけだ。青白い光は何筋もあったそうだ。暗号長は緊張した様子でいった。

「敵はまだこちらに気づいていないようだが、単艦ではない可能性が高い」

艦長の判断は速く、すぐに「総員潜航配置」の音が響き渡った。来るべき時が来たのだ。

潜水艦には水中聴音機というのがついていた。敵の船が出す音を聴き取る機械だ。それを専門に聴き取っている人たちがいて、次々に報告が入ってきた。おじいちゃんは気が弱いから、それを聞いているだけで胸がどきどきした。

「左舷二十六度に音源がある。はっきりと聞こえる」

「音源はいくつもある。だんだん近づいてくる。感度二。スクリー音^{スクリーン音}が聞こえる。大艦のようだ」

「高速の大艦音が二つ、いや三つ。駆逐艦らしい音も多数聞こえる。音源はどんどん大きくなっている」

*2 掌水雷長^{しょうすいらいちやう}が発射管室へ走っていき、「魚雷戦用意」という伝令の音が響き渡った。送風口から入ってきた冷風が「5」

停まり、身体中から一どきに汗が噴き出してきた。

もう混乱の極みだった。戦闘飲料のサイダーが各区画に配られ、誰もがせわしなく動き回っていた。白い鉢巻をした艦長が「水をもつてこい」と叫んでいた。全員が汗をだらだらと流し、肩で息をしていた。おじいちゃんは発射管室へ行ってみた。魚雷の安全装置が外され、発射管に圧搾空気を注入している最中だった。^④ いよいよ始まるのだと思った。

(蓮見圭一「夜光虫」)

〔注〕 *1 哨戒……………見張ること。

*2 掌水雷長……………水中兵器全般の責任者である水雷長を補佐する士官。

(一) ——— A C のカタカナを漢字に改めなさい。

(二) 「1」「5」を補う言葉として最もふさわしいものを、次のア～コより選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

ア 冷静に	イ 完全に	ウ 元気に	エ 心外に	オ 無心に
カ 正確に	キ 不意に	ク 得意に	ケ 意外に	コ 心配に

(三) ——— ① 「インドシナ海の沖合で敵の船に出くわした時の話」とありますが、航海長はどういうことを伝えるために、この話をしたのですか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 潜水艦は大和や武蔵の登場によって、もはや海軍の主力と見なされなくなった、ということ。
イ 潜水艦の乗組員は、戦果を期待されていないことであって闘志を燃やした、ということ。
ウ 乗組員の冷静な判断が、非力とされていた潜水艦に大きな戦果をもたらした、ということ。
エ 潜水艦は反撃に対しほぼ無力なので、攻撃するかどうか慎重な判断を要する、ということ。
オ 航海長は攻撃の機会を何度も見送らざるを得ず、ずっと悔しい思いをしてきた、ということ。

四——②「敵の戦艦隊が近づいてきていることが分かった」とありますが、潜水艦はこの戦艦隊に、なぜ攻撃されなかったのですか。十五字以内で説明しなさい。

五——③「そんなこと」とは、どういうことですか。三十五字以内で説明しなさい。

六——④「いよいよ始まるのだ」という表現には、どういう気持ちが表れていますか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 魚雷を撃った後、敵の反撃までに逃げ切ることができたらどうかという、航海長の不安。
イ いずれ現れるはずだった戦艦隊との、死を覚悟した戦いを目前にした、軍医長の緊張感。
ウ 周囲の混乱をよそに込み上げる、何としても生きて帰りたいという、軍医長の望郷の念。
エ 今度こそ大艦隊らしい敵が現れ、ようやく一矢報_{むか}いる時が来たという、艦長の意気込み。
オ 百名を超える乗組員の命をかけ、ついに魚雷戦に臨む時が来たことへの、艦長の責任感。

国語の問題は、次のページに続きます。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ラトウナプラは宝石売買の町として知られているのだが、町全体に宝石商がひしめいているというのではなく、宝石商の店が並ぶのはごく町はずれの一角で、中心部にはバスの通る大通りがあり、路地には古くからの小さな商店が軒を並べ、露天商が店を広げて、人々が日常の買い物を楽しんでいた。私たちも、百年前から同じ窯で焼いているというパン屋ご自慢のパンや、なにに使うのかよくわからない花形の金型を金物屋で買ったりしながら、果物屋や乾物屋や文房具屋や生地屋をのぞいて歩き、大通りを渡って、散歩がてら高台へと上がっていった。

どのくらい上がっていっただろうか、細い石段を上った先で、女子校と思われる建物の前に出た。白い制服を着た小学生から高校生くらい年齢の女の子たちが、建物の内部にも校門の前にもたくさんいて、笑いさんざめいている。女子生徒だけでなく、卒業生や保護者や先生方と思われる大人たちも混じっている。

そこにいる人たちが、①全員白い服装をしているのだ。スリランカでは白が礼装なのだろう。生徒たちは白いワンピースの制服で、大人たちも女性は皆白いサリイを着ている。私が子どもの頃住んでいた関西の阪神間にも夏服がまっ白なワンピースの女子校があつて、通学電車のなかでもとてもめだつていたのだが、まっ白な制服を毎日白いまま保つておくのは至難の業だろうと、ふつうに紺の制服だった私はいつも思っていた。しかしスリランカの女子生徒たちの白い制服姿はごく自然で、汚れなど微塵も感じさせない。

目が合った女の子にっこりすると、向こうもにっこりする。どこの国も同じである。するとそこで立ち話をしていた白いシャツに眼鏡の男性が（男性は数えるほどしかない）笑顔で近づいてきて、肩に掛けていた白い紐を私の手首にさつと結んでくれた。インドで僧侶が結んでくれたのは赤い紐だったが、今度は薄い赤みがかった白である。前の紐が数ヶ月前に切れたところだったので、こうしてまた新しく結ばれたのも縁だと思う。男性になにか行事をしておられるのか聞くと、今日はこの学校の百周年記念のお祝いをしているんです、どうぞお入り下さいと校内に②ショウじ入れてくれた。

時間はちょうどお昼どきで、③コウドウではランチパーティーが開かれている。保護者が持ち寄ったと思われる料理が脇のテーブルの上にどっさり置かれていて、そこからバイキング形式に好きなものを取って、並べられた木製の長机でめいめい自由に食べるのである。椅子にはきちんと白いカバーが掛けられていて、大きな窓からは「1」光が入り、楽しげに食事をする人たちのざわめきと相まって、晴れがましいお祝いの雰囲気包まれている。

料理は特別な馳走ではなく、ゴーヤやインゲンやポテトやナス、オクラ、豆、フィツシュ、チキンなど、スリランカで日常的に食べられているカレーである。お昼ごはんを食べたばかりで、食べたくてもあまり食べられないのが至極残念だったが、眼鏡の男性

は遠慮^{えんりょ}しないでどんどん取って下さいと、お皿に山盛りに盛ってくれる。私は青くなってもう結構ですと言いながら、隅^{すみ}に素焼^{すやき}の平たい小鉢に入ったカードを見つけてひとつもらった。カードは水牛の乳を使ったヨーグルトで、独特の風味がある。町の店頭で売られている自家製カードは植木鉢ほどに容器が大きく、手が出せないでいたが、ここにあるカードはひとつとり分の食べ切りである。素焼の小鉢に入れるのは昔ながらの製法で、鉢がヨーグルトの水分を吸って頃合いの固さになるからだろう。

眼鏡の男性は教師ではなく女子校専属のドクターで、小学生の生徒たち数人と一緒に私たちの前に座り、山盛りのランチを食べ始めた。女の子たちはⅢ興味津々^{きゅうみづず}で私たちを見ている。ドクターはこの学校には生徒は三千人以上いて、先生方は三百人以上いると話す。寮もある巨大な女子校である。ドクターは話しながら、カードにはヤシノミの蜜^{みつ}をたっぷりかけるといいと瓶^{びん}を渡してくれる。少し癖があつて濃厚なカードは蜜をかけると格段に甘くおいしくなる。

ランチを食べ終わると、ドクターは奥から②生徒をふたり呼んできて、このふたりは来春から日本の京都の女子校に留学するんですと言つて、私たちに引き合わせてくれた。おそらく学内で成績最優秀のふたりなのだろう、黒髪をお下げにして、天真爛漫^{ちんぜんらんまん}な天才肌と眼鏡をかけた秀才タイプの、みるからに賢そうな彼女たちは、はにかんだ笑みを浮かべて、跪^{ひざまず}いて目上の人にするスリランカ式の礼をしてくれた。私はすっかり恐縮して、お名前を教えてもらえますかとノートを差し出すと、ふたりは恥じらいながら学校名と名前を書いてくれた。

その文字が、うんと小さいのである。優等生なのになぜそんな豆粒みたいな字を書くのだろうと思つて、次の瞬間、彼女たちにとつてはノートやペンは大切に惜しみながら少しでも長くたくさん使えるように、字を小さくして使うべき貴重なものであつて、しかも私のような年上の外国人の持ち物に自分の名前を書くことなど初めてだったのだらうと思ひ当たった。私は他のページにある自分の乱雑な殴^{なぐ}り書きを③たいそう恥^はじた。そしてお礼を言つて、おそろくなんの役にも立たないだらうけれども、もし日本に来たときに困ることがあつたら連絡して下さいと言つて名刺^{めいし}を渡した。

それからドクターに、カードの入っていた④素焼のうつわをもらつて帰つてもいいかと聞くと、ドクターはおかしそうな顔をして、もちろんどうぞとあり合わせの紙に包んでくれた。最先端^{最先端}ギジュツを誇る先進国の日本人がなぜこんな粗末なものを欲しがるのだらうと「2」思つただらうが、私はその純朴^{じゅんぱく}さが欲しかったのだ。

学校では十九時から古来の民族舞踊が行なわれるということだった。私たちはⅣおいとましたが、一日かけて記念行事が続いていくのだらう。白い服をまとった女性たちで学校全体が明るく清らかな感じに満ちていて、未来が輝いてみえて、美しかった。

(若菜晃子『旅の断片』)

(一) — A C のカタカナを漢字に改めなさい。

(二) ~~~~~ I ~ IVの意味として最もふさわしいものを、次のア ~ オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I ひしめいて

ア 立て込んで
イ 店を開けて
ウ 散らばって
エ 競い合って
オ 向かい合って

II 笑いさんざめいて

ア にこやかに手を取り合って
イ けたたましく笑い転げて
ウ ほほえみながら涙ぐんで
エ 笑いながらささやき合って
オ にぎやかな笑い声を立てて

III 興味津々で

ア 感慨^{かんがい}深げに
イ 関心深げに
ウ 面白半分に
エ ぶしつけに
オ 気遣^{きづか}わしげに

IV おいとました

ア お願いした
イ お休みした
ウ お断りした
エ お別^{わか}れした
オ お誘^{さそ}いした

(三) 「1」「2」を補う言葉として最もふさわしいものを、次のア ~ オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1

ア かんかんと
イ こんこんと
ウ さんさんと
エ たんたんと
オ らんらんと

2

ア あさましく
イ いぶかしく
ウ うとましく
エ ほこらしく
オ もどかしく

四 ——— ①「全員白い服装をしている」とありますが、人々はなぜ礼装に身を包んでいるのですか。十五字以内で説明しなさい。

五 ——— ②「生徒をふたり呼んできて」とありますが、呼ばれた二人に、筆者はどういう言葉をかけましたか。その内容にあたる表現を本文より二つ探し、最初と最後の三字をそれぞれぬき出しなさい。

六 ——— ③「たいそう恥じた」とありますが、筆者が二人の文字を見て、自分になんという姿勢を感じたからですか。十五字以内で説明しなさい。

七 ——— ④「素焼のうつわ」を、筆者はなぜもらったのですか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア ちようどよい大きさや伝統的な製法に引かれ、ほどよく水分を吸収してくれる機能にも感心したから。
イ 温かいもてなしを受けたのに余り食べなかったので、ドクターにせめて感謝の気持ちを伝えたいから。
ウ 学校全体に満ちる素直な温かさを映し出しているように感じ、旅の思い出として手元に置きたいから。
エ 留学する二人の生徒に日本で連絡をもらうかも知れないので、その時に見せて喜んでもらいたいから。
オ 便利でぜいたくな物にあふれた日本に持ち帰れば、失ったものを取り戻すきっかけにできそうだから。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

謝罪の定型句に「ごめんなさい」や「Excuse me (お赦ゆるめください)」という言葉が含まれることから明らかなように、謝罪にはしばしば、相手に対して赦しを請う意図が込められている(あるいは、そのように相手に解釈される)。

被害者が加害者に対する一切の「1」を解消させ、事件や事故が起こる以前の人間関係に戻ること——あるいは、それ以前は何の人間関係もなかった場合に、元の無関係な状態に戻るなど——は、言うまでもなく難しい。とはいえ、加害者をそれ以上咎めずにAスませる、という程度の意味で「赦し」というものをさしあたり捉えらるるならば、謝罪が赦しの実現の重要なきっかけになることは、ある程度期待できるだろう。

普通、被害者から赦されることを望む加害者は、謝罪を実行しようとする。しかし、①自分の意志だけで常に実行できるわけではない。相手に重大な損害が生じている出来事においては、相手に向かって自分勝手に「すみません!」と声をかけるだけでは謝罪にならない。それゆえ、たとえば相手と面会する時間をBモウけて、当該の出来事を自分がどのように受けとめているかや、いかに反省し、どう償おうとしているかを丁寧に伝えることが必要になるだろう。ことの重大さに応じて、謝り方というものは変わってくるのだ。

しかし、相手はそもそも会ってくれないかもしれない。ならば、同様のことを手紙に書いて送るのだろうか。しかし、相手はその謝罪文の受け取りを拒否するかもしれない。《重い謝罪》をするためには加害者は、謝罪によって被害者に赦される以前に、謝罪すること自体を許される必要がある。だからこそ、加害者はときに、手紙や電話などを用いて被害者にまずコンタクトをとって、謝罪をさせてくださいと許可を求める必要があるのである。

繰り返し返すなら、謝罪したからといって赦されるとは限らない。だが、謝罪が許されること、すなわち、謝罪を謝罪として相手に受け入れてもらえることが、赦しの実現のための重要な「2」になりうることは確かだ。時間が解決する場合など、謝罪しなくとも赦されるケースもあるとはいえ、大抵のケースでは、最低限、謝ることができていなければ、赦されるのは困難だ。謝罪——および、その一環としての償いの約束と履行——は、被害者の物心両面の損害が修復され、受動的な混乱状態や無力感に苦しんでいる状態から回復し、状況に対する一定のコントロールを取り戻す、その手助けとなりうる。そして、②多くの場合、その延長線上に「赦し」という契機が位置づくのである。

いま跡づけたのは、謝罪の実現が赦しの実現に結びつく次第だが、赦しが加害者にとつてだけではなく、被害者にとつても重要な意義をもちうることを、ここであわせて確認しておこう。

事件や事故に巻き込まれた人の人生は、それ以降大きく変わってしまう。生活の多くの部分で「被害者」という存在であることを余儀なくされ、災難の記憶や負の感情に繰り返し苛まれ、裁判などに時間や労力を奪われ、場合によってはマスメディアやソーシャルメディアへの対応で疲弊する。身心ともにその事件や事故に「3」釘づけになり、囚われてしまう。本来は、自分がずっと大切にしていた人から来た生活や取り組みがあったのに、その事件や事故がどうしても心の中心に居座ってしまう。それゆえ、加害者と向き合い、その謝罪を受け入れ、相手を赦すことは、被害者が心の区切りをつけ、新しい人生を歩み出すための重要なきっかけとなりうる。

ただし、注意すべきなのは、赦しはときに周囲の圧力によって促されてしまうということだ。たとえば、加害者が痛々しい土下座を繰り返したり、職を失うなどの強い社会的制裁を受けたりしたことに「4」された第三者が、被害者に対して「これだけ謝ったのだから（これだけ償ったのだから）もう赦してやりなさいよ」という「D」タグの圧力を向けることがある。あるいは、その種の赦しを迫る空気が、被害者の周囲で醸成されることがある。

また、赦しの次元についても注意する必要がある。赦しがまさに被害者の心の区切りとなるには、相手へのそれ以上の刑罰や賠償を求めないというだけでは十分とは言えない。それがたとえ周囲の圧力によるものではなく、自分の意志によるものだとしてもだ。なぜなら、行動だけではなく感情の次元で、相手をこれ以上咎める気にならなくなる——相手に対する怒りや憎しみから解放される——という状態に至ってはじめて、相手を心から赦したことになるからだ。

問題は、③ そうした次元での赦しは被害者の意志によって自由自在にもたらされるものではない、ということである。愛そうと思っても愛せるとは限らないのと同様に、赦そうと思えば赦せば赦せるわけではない。感情とは自ずと湧き出てくるものであって、完全には自分の自由になりえないのだ。むしろ、相手を心から赦せたという状態は、被害者にとっても予見できないかたちでいつの間にか我が身に訪れるものであり、その意味で一個の「僥倖」に属するとも言える。ドイツ出身の政治哲学者ハンナ・アレントの表現を借りるならば、「④ 赦しの行為は決して予見できない」のである。

（古田徹也『謝罪論』）

〔注〕 * 僥倖……思いがけない幸運。

（一）—— AとDのカタカナを漢字に改めなさい。

(二) 「1」 「4」を補う言葉として最もふさわしいものを、次のア～オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1	2	3	4
ア あてこすり	ア アピールポイント	ア 否応なく いやおう	ア 異化
イ しめくくり	イ ウィークポイント	イ 臆面もなく おくめん	イ 一般化
ウ はらづもり	ウ セールスポイント	ウ 心置きなく	ウ 感化
エ ゆきづまり	エ ターニングポイント	エ 性懲りもなく しょうじ	エ 正当化
オ わだかまり	オ ピンポイント	オ そこはかとなく	オ 風化

(三) —— ① 「自分の意志だけで常に実行できるわけではない」とありますが、筆者がどのように考えるのはなぜですか。四十五字以内で説明しなさい。

(四) —— ② 「多くの場合、その延長線上に『赦し』という契機が位置づくのである」とは、どういうことですか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 謝っても赦されるとは限らないが、多くの場合、赦されるには謝る必要があるということ。
 イ 謝りたいという気持ち伝わることで、被害者との関係も今までのものに戻るということ。
 ウ まず先に被害者に赦されることで、大抵の場合は素直に謝るための準備が整うということ。
 エ 謝ることで反省している気持ちを丁寧に相手に伝えれば、必ず赦してもらえるということ。
 オ 謝ることで被害者が通常の状態に戻れば、被害者はそのことに感謝してくれるということ。

(五) ——— ③ 「そうした次元での赦し」とは、どのような赦しですか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 加害者の与えた損失がきちんと回復された上での赦し。
イ 被害者と周囲の人々が赦すことに合意した上での赦し。
ウ 被害者が過去と向き合う気力を取り戻した上での赦し。
エ 加害者に与えられた刑罰や賠償に満足した上での赦し。
オ 加害者への怒りや憎しみを抱かなくなった上での赦し。

(六) ——— ④ 「赦しの行為は決して予見できない」とありますが、この表現の、本文全体の内容をふまえた説明として最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 加害者が手順をふんで謝ることが、加害者にとっても重要な区切りになるはずである。一方、被害者が事件や事故への思いを整理できたとしても、加害者を赦そうと思うようになるかどうかは分からない。

イ 加害者が赦されるためには、被害者の示す条件を満たし、与えた損害を回復する必要がある。一方、加害者が条件を満たしている被害者によって判断されるかどうかは謝つてみなければ分からない。

ウ 加害者が赦されるためには、被害者を気づかした時期に謝罪する必要がある。一方、被害者の事件や事故に対する複雑な思いは表に出てこないため、いつ加害者が謝罪することができるかは分からない。

エ 加害者は申し訳ないという思いを相手の事情もふまえて伝える必要がある。一方、謝ったとしても被害者がそれをどう感じるかは不確かで、そのときになってみなければ赦されるかどうかは分からない。

オ 加害者が正しく謝ることができれば、被害者は加害者を赦すはずである。一方、どう謝ればよいかはそのとき被害者が抱えて^{かか}いる思いによって変わるため、被害者と直接対面してみなければ分からない。